ことぶき「なか」だより
No.192
2019.11

発行所　日本キリスト教団　なか伝道所
〒231-0026 横浜市中区寿町 3-10-13 金岡ビル 203/205
Tel.（045）671-1109
振替　00200 － 1 － 47369　E-Mail : naka-ch@hb.tp1.jp
http://w01.tp1.jp/~ja66945502
発行者　堀江有里　（題字　松橋 順）

宣教方針
① 貧しい人々への福音に共にあずかる。
② 地域の問題に関わる。
③ 諸教会に呼びかけてゆく。

集会　主日礼拝　日曜日　午前 10 時 30 分より

寿のまちにかかわりつづけて

森 英夫 さん（寿医療班）

寿町で二五年近くにわたり、看護師・ケアマネージャーとしてさまざまな形で医療サービスの提供に従事してこられた森英夫さん。二〇一五年以降は横浜市議会議員選挙や参議院選挙に立候補するなど、活動の場を政治の世界にも広げようとしている。寿町での経験を通して、どのような思いで現在の活動をしておられるのか、お話をうかがった。

●寿町との関わり

看護師になった二三歳の頃、同じ病棟で働いていた看護師の同僚が阪神大震災での「シェア」（保健医療を中心とした国際的なＮＧＯ）によるボランティア活動に参加しました。シェアは寿町の医療支援にも参加していたこともあり、その人に紹介されて寿町に通うようになりました。一九九五年の夏だったと思います。やがて越冬闘争にも参加するようになりました。まだ東京に住んでいたので、日帰りかせいぜい一泊で帰って通うという感じだったのですが、もっと寿町にいたいと思うようになっていきました。

看護師になってから、救急科などに勤務して、病院で働くことにもやりがいを感じていたのですが、越冬で関わった人がアルコール依存で亡くなったことをきっかけに寿町に来ることを見据えて精神科の病院に移りました。そして二〇〇二年に寿町に引越してきました。

●寿町での活動

寿町に来てからは、「ことぶき共同診療所」、「カスタム介護支援センター 寿」のケアマネージャー、「訪問看護ステーション・コスモス」の三つの仕事を掛持ちしました。私がそれまで勤めてきた病院では、「あなたは患者、私は医者」というスタンスで医療サービスが提供されていました。しかし、「ことぶき共同診療所」元院長の故・田中俊夫医師が行おうとしている医療は「あなたも私も同じ人間」という雰囲気があったと思います。

毎月第三日曜日に、最初は寿労働センター、いまは横浜市寿生活館の前の公園で、医療相談を受付けるようになって約二五年が経ちました。一九九五年当時は一日に一〇〇人以上もの人が相談に訪れることもありましたが、最近は一〇人程度に減っています。これにはいろいろな理由がありますが、ひとつには野宿する人が減ってきたことがあります。いまはドヤに入ることを条件に生活保護を受給し、それをもとに医療サービスを受ける人が増えてきたのです。私としては、野宿しながらでも医療サービスを受けられるという選択肢が残されているほうがよかったのではないかと思っているのですが。

ちなみに、この医療相談には、クレジットカードの使い過ぎでサラ金からお金を借りるようになり、ついには破産するという人が社会問題化するようになってから、司法書士の方も参加するようになっています。そして労働問題に関する相談にも対応するようになっています。

医療相談に来る人も、だんだん変わってきました。最初の頃はフィリピンから来ている人も多かったです。丸太のように太い腕を見て驚きました。いまは外国人はめっきり見なくなりましたね。その頃は酔っぱらってからんでくる人も多かったのですが、いまはみなさんだいぶ歳を取っておとなしくなってこられたのかなぁと。

それから、以前は「越冬」でのパトロール中に倒れている人を発見したり、臨時に宿泊するプレハブに入ってからも体調を崩して亡くなるというケースが毎年ありました。しかし最近は私たちが把握できている限りという

ことになりますが、重症のケースはだいぶ減ってきている印象です。これはひとつには、介護サービスが普及したおかげで、誰にも面倒を見てもらえずに、人知れず体調を悪化させていくというケースが少なくなってきているからだと思います。

それに代わって、ガンの相談を受けることが多くなってきました。ガンという病気のイメージは、不治の病から治る病気へと変わり、在宅での治療が広まっています。ただ、寿町に住む人は、家族がいないなかでどういう治療をすればいいのか、誰に相談すればいいのか、という悩みを抱えています。私としては、行政も関わる形で制度化していって、どこでも誰でもガンの治療相談を受けられるようにしていければいいと考えています。

リーマンショックが起きた二〇〇八年からは、毎週金曜日に行われる炊き出しでも医療生活相談に乗るようになりました。通常の炊き出しの配食数は三〇〇～七〇〇食ぐらい。実人数は一〇〇～三〇〇人ぐらいだと思います。ほとんどの人は、血圧を測っておしゃべりをして帰っていきますが、なかには具合が悪いと相談しに来る人もいて、一緒に役所や病院まで行くようなこともあります。

●沢渡中央公園での野宿者襲撃事件

横浜駅から少し行ったところにある沢渡中央公園には、かつて大勢の野宿者が生活していました。公園整備計画が持ち上がるなかで、野宿している人を脅迫し、住んでいたテントなどを壊して力づくで追い出してしまうという事件が起きたのです。ほかの公園で野宿者が襲われて命を落とす事件もありましたが、そうしたことにつながりかねない恐ろしい事件でした。

野宿している人の立場に立ってどれだけ考えられるか。これが大事なことではないでしょうか。家庭や仕事などいろいろな事情でやむを得ず野宿しているのであって、そうした状況をなかなか変えられないでいるわけです。住む場所を壊してそこから出て行けと言うだけでは、まったく野宿している人たちのことに思いが至っていない。直接殴ったり傷つけたりするわけでなくても、許せないことです。

私は事件後、公園整備に関する住民説明会に参加したのですが、近隣住民の多くは、野宿者をいつまで公園に置いておくんだという調子で、まったく聞く耳を持たない感じでした。私は野宿者の立場に立とうとビラを配りましたが途中で止められましたし、横浜市の職員の人も暴力はよくないと言うだけで、野宿者への理解を促すような話をできる雰囲気ではありませんでした。でも、こういう場に出て行って、違う立場の人がいることを伝えていくことが大切だと感じました。

●誰もが「仕事」を持って「働いて」生きていける社会へ

いまの日本では、経済的な価値がないと仕事ではないという考えが一般的だと思います。では、炊き出しの準備や、そこに集う人たちの相談相手になることは仕事ではないのでしょうか。こうした行為からは確かにお金は生まれませんが、私は立派な仕事だと思います。寿町での活動を通じて、私は社会的な役割を持って生きることが大事だと考えるようになってきました。私が言う「仕事」「働く」というのはそういう意味です。経済優先の社会では、利益をあげられない人はいらない、という風潮があります。それが、生きづらさを生み、働きづらさを生み、野宿者を社会で居づらくさせているように感じます。

いまの日本には、いちど社会から脱線すると、元に戻れないという雰囲気がありませんか？　病気になってしまったり、犯罪を犯してしまったなどの事情でこれまでの生活を続けられなくなった場合、なかなかその後の人生が自由に選べない。自分では脱線したとは思っていませんが、私も高校に行かないことで、同級生たちから取り残されたなぁと感じた時期もありました。

政治を志した直接のきっかけは二〇一一年の東日本大震災で、そこでのボランティア活動を通じて政治からちゃんと変えていかなければならない、という思いで選挙に出馬するようになりました。いまのところことごとく落ちちゃっていますけどね（笑）。市民運動だけやっているのでは怠けてしまうと思って、社民党に入党しています。あらゆる機会を通してみなさんの声を聴いて、政治に反映していきたいと思っています。

（まとめ・幸前元）

風　景

なぜ寿町に足を運ぶようになったのか、思い返しても時系列が曖昧だったのでPCとネットの記録を調べると出会いの原点は約四年前でした。

隣町の横浜YWCAの運営委員有志で堀江有里さんをお招きした会を模索していたところ、当時京都にお住まいの有里さんが東京で行われた「日本におけるクィア・スタディーズの構築」研究グループによる報告会に登壇され、そこで初めてお会いしました。その後、二〇一七年四月に主催ではなく共催でしたがFAV（フェミニズムと日本や世界のアクティビズムのドキュメンタリー映画会をしている）の映画会とお話し会が横浜YWCAで行われることになりました。冬のFAV連続上映会の折、翌年度には、なか伝道所に赴任される噂を聞き寿町に訪れました。そして寿夏祭り、越冬闘争を経て自分の中でなくてはならないものになりました。

寿町にある高い自治力・社会関係資本がただ単に「絆」や「居場所」「社会の効率性」という豊かさだけでなく、自分の中では街がひとつの宗教施設である「幕屋」のようにぼんやりと感じています。

（汀なるみ）

使信

あまねくのべつたえる

堀江有里

また、しるしや奇跡の力、神の霊の力によって働かれました。こうしてわたしは、エルサレムからイリリコン州まで巡って、キリストの福音をあまねく宣べ伝えました。このようにキリストの名がまだ知られていない所で福音を告げ知らせようと、わたしは熱心に努めてきました。それは他人の築いた土台の上に建てたりしないためです。

「彼のことを告げられていなかった人びとが見、聞かなかった人々が悟るであろう」と書いてあるとおりです。

（ローマの信徒への手紙十五章十九～二一節）

■ブルーノート・レコード

「ブルーノート・レコード―ジャズを超えて」という映画があります。ソフィー・フーバーという女性監督によるこの一本の映画は、レコード会社「ブルーノート・レコード」の過去・現在・そしてこれから起こりゆくであろう未来を描き出した物語です。登場する人物たちの圧倒的多数はアフリカン・アメリカン男性たち。つまり、北米に渡りながらも自分たちのルーツはアフリカにあると強く意識してきた、あるいはさせられつづけた男たちです。

ブルーノート・レコードの立ち上げは一九三九年。まさにヨーロッパでは、ナチスが全体主義へと移り変わっていく時期。どんどんときなくさくなる日々のなか、ふたりの青年アルフレッド・ライオンとフランシス・ウルフは、ドイツからニューヨークへと渡ります。夢を描きつづけるという共通点をもって、かれらは新天地へと出かけていくわけです。そこにブルーノート・レコードの出発点はあります。そしてその後、こんにちに至るまでの八〇年間、歴史を刻みつづけています。かれらは、ジャズという音楽ジャンルをとおして、その都度、時代の大きな流れに対して抵抗を試みてもきました。

■ジャズにささえられる抵抗運動

アフリカにルーツをもつ抵抗運動の担い手のひとり、ジャズをこよなく愛した人物に、マルティン・ルーサー・キングJr.牧師がいます。一九五〇年代から、公民権運動の闘いのただなかで、その先頭にたってきた象徴的なひとりです。「わたしには夢がある」―そんな一節を含む有名な演説があります。この言葉はいくつもの場でくりかえし語られてきましたが、もっとも有名なのは「職と自由を求めるワシントン大行進」（一九六三年八月二八日）での演説です。一部だけ抜粋します。

絶望の谷間でもがくことをやめよう。友よ、今日私は皆さんに言っておきたい。われわれは今日も明日も困難に直面するが、それでも私には夢がある。それは、アメリカの夢に深く根ざした夢である。

私には夢がある、それは、いつの日か、この国の国民が立ち上がり、「われわれは、すべての人間は平等に造られていることを自明の真理とみなす」というこの国の信条を真の意味で実現させるという夢である。

「夢」という言葉にあらわれているように徹底的に前向きな演説です。しかし、その文脈を考えてみれば、そこには激しい怒りが横たわっている。その怒りという感情が、人びとを結びつけ、「夢」というひとつの出来事をめざす道筋をかたちづくっていたわけです。

しかし、アフリカをルーツとする人びとが完全な解放を、自由を、十全な権利を与えられる時代に居合わせることなく、キング牧師はメンフィスにあるロレイン・モーテルで殺されました。一九六八年四月四日のことです。

えーとねえ

保育園からの帰り道。

母　**「今日の誕生日会で、ちゃんと自分の名前を言えた？」**

知　**「うん、（わざとかわいらしい声で）『こうぜん　とも』って、かわいく言えたよ」**

（ユーモアのセンスを磨く　幸前　知3歳）

■伝えられゆく音楽、通底する思い

いつも闘いのさなかには音があった。旋律があった。ジャズは、やはり奴隷としてアフリカから連行されてきた人びとの歴史が通底している音楽です。そして、キング牧師に多くの力を与えたジャズはブルーノート・レコードがつくったものでした。

その音には、支配されることを問い、体制に迎合することなく抵抗をつづけるかれらの抵抗の志が流れています。ソフィア・フーバーが描き出そうとしたのは、くりかえし、その音楽が生み出されてきた人びとの魂を揺さぶる怒り、思いではなかったでしょうか。まさに人と人とのあいだに存在する共鳴板のようなもの、ふるえることによって伝わり、おたがいに揺さぶられていく音の波だったのではないでしょうか。

パウロもまた、その時代の音、そしてリズムとともに生きてきた人ではなかったか。その生き方は「神のために働くことをキリスト・イエスによって誇りに思っています」（一七節）という思いのなかで、培われ、伝えようとされていったリズムに生きています。まさに、世界中に響き渡らせようとした、あまねくのべつたえるという思いをもって「他人の築いた土台の上に建てたりしない」（二〇節）という強い意志のもとに、培われ、伝えようとされていったリズムです。

はかりしれないパウロのたくさんのほころびがある言葉たちを乗せて、時代や文化を超えて、そのリズムは、わたしたちのところに届けられているのです。その合間に生まれてきたさまざまな理不尽なことから、それに対する抵抗の歴史に思いを馳せつづけたいものです。

【付記】

映画『ブルーノート・レコード』を知ったのは、東京都内で活動する市民運動団体「女性と天皇制研究会」の定例会（一〇月一六日）でのことでした。教えてくださった近藤和子さんに、また大事な時間と空間に感謝します。

まど

▼台風十九号は広範な地域に甚大な被害を及ぼしました。被災された方々に心よりお見舞い申し上げます。▼多摩川氾濫のニュースに触れ、台風到来翌日、川崎戸手教会を訪問しました。建物二階までの浸水、そして分室が暴風に飛ばされてしまった状態。孫裕久牧師をはじめ教会員の方々、横浜ＹＭＣＡの方々がヘドロの掃き出しをされていましたが、とにかく想像力をはるかに超えた状況に言葉を失いました。土手から教会堂（ヨルダン寮）への道に膝まで溜まっていたヘドロの掃き出し作業がおこなわれていたのは、わたしたちが礼拝を守っていた時間帯。その事実に礼拝ができる、ということがいかに貴重なのか、打ちのめされる思いでした。

▼たびたび水害にみまわれる河川敷。ヨルダン寮は、なか伝で一緒に礼拝を守るメンバーがかつて生活されていた場所。そのことをも思い起こしながらほんの一時間ほどデッキブラシやスコップをとにかく動かし続けましたが、やはり言葉は見つかりません。祈り続けることのほか何をすることができるのか。

▼京都時代の伝手で昨年から都内のいくつかの大学で講義を担当しています。ある女子大の社会学の講義で、戸手の歴史を踏まえた上で、この日の報告をしました。いつもより真剣な学生たち。涙をためてコメントカードを提出する学生もいました。身近なはずの場で起こっていることを伝えること、歴史を知ること、そして想像力を働かせること。他者とのあいだに共鳴板をもつこと。自分自身の持ち場で連帯の祈りをささげ続けたいと思います。（堀江有里）

〈学習会のお知らせ〉

仮題：「崔昌華牧師の人権運動」
日時：二〇二〇年二月十六日（日）
十三時半～十五時（予定）
場所：なか伝道所
講師：崔善恵さん
予約は不要でどなたでも参加できます。

編集後記

ケガをしたカラス（！）を拾い、一〇年近くも世話をして看取った、という話をさりげなくされていた。これはなかなかできることではない。森さんの人柄が感じられるエピソードだった。（元）